

大沼宜規著

『考証の世紀——十九世紀日本の国学考証派』

(吉川弘文館・二〇二二年)

三ツ松 誠

本書は、著者大沼宜規氏が筑波大学に提出した学位請求論文を加筆修正して刊行したものであり、目次は次の通りである。

序 章 「国学考証派」研究の視点

第一部 江戸時代後期における「国学考証派」

第一章 寛政の改革と「国学考証派」の登場

第二章 考証の浸透

第三章 幕末期における「国学考証派」の機能

第二部 「国学考証派」の方法とその深化

第一章 屋代弘賢の歴史考証——『古今要覧稿』の編纂とその周辺

第二章 小中村清矩の「六国史」考証——明治版「国史大系」の編纂とその方法

第三章 木村正辞の『万葉集』考証——旧蔵書からみる研究方法

第三部 「国学考証派」にとつての明治

第一章 小中村清矩・木村正辞の官省出仕と考証実務

第二章 「国学考証派」の後継者としての池辺義象

終 章 「国学考証派」の歴史的意義

評者にとつて本書の刊行は、予想外のうれしい出来事であった。著者の大沼氏は長らく国立国会図書館に勤め、近世後期から明治期に活躍した好古家・考証家の旧蔵書を調査・研究し、関係史料を紹介する地道な仕事を積み上げてきたことが知られている。書誌学的性格も強い氏の成果の数々から評者は、今では半ば忘れ去られた学者の営みの重み、また特殊文庫の世界の奥深さについて、教えられるようになった。だが反面、目録類等多い著者の仕事を纏めて読めるようにするのはなかなか難しいのではないか、とも思っていたのだった。

確かに本書も、著者のこれまでの研究成果の全てを一冊にまとめたものではない。しかしそれは、必ずしも残念なことではない。本書は、「十九世紀」の「国学考証派」という形で研究対象を定式化し、その歴史的意義を問う形で研究成果を提示するという、明確な役割を持っているからである。

十九世紀の蔵書家たちについての研究水準は、もともとは著者同様、図書館・文庫で古典籍を取り扱う中で腕を磨いてきた書誌学研究者によつて築かれてきた部分が大い（川瀬一馬や森銑三、丸山季夫らの仕事が代表的なものだろうか）。諸書の来歴を解き明かし、古人の横顔を浮かび上がらせるその腕前には、少なくとも評者のような者には、到底叶わないものがある。で

は、その叙述された個性は、歴史的世界の全体性の中にどう位置付けられるのだろうか。彼らの業績を読みながら、はじめはそんな間にも抱くのだが、面白い面白いと読み進めていくうちに、自分が間違っているような気分になり、結局愚かな評者は、疑問を持つていたことさえ忘れていくのであった。

しかし近年では、それらとは立場を異にする研究が登場している。本誌二六号に掲載された阪本是丸「明治国学の研究課題」（一九九四年）が、「近代天皇制国家をイデオロギー的に支えた思想や歴史観、あるいはそれを制度的」「に支えた古典知識や考証の基盤に近世以来の国学のイデオロギーや考証学が存在すること」への注目を促して以来、考証的な明治期の国学者に関する研究が進んだのである。本書とも研究対象を同じくする部分がある齊藤智朗「井上毅と宗教」（弘文堂、二〇〇六年）、藤田大誠「近代国学の研究」（弘文堂、二〇〇七年）が代表的な業績であろう。あるいはまた、近代国民国家における学問の歴史的被拘束性を問う研究潮流が広がりを見せるなかで、史学についてはマーガレット・メーラー『歴史と国家』（邦訳・東京大学出版会、二〇一七年）、文学については品田悦一・齋藤希史『「国書」の起源』（新曜社、二〇一九年）のような仕事が現れ、明治国家における考証派の国学者と漢学者たちの動きが取り上げられてもいる。いずれも、その重要性をここで繰り返す必要はあるまい。とはいえ評者としては、読めば読むほど、無から突然生まれただけではないそれら学的営為の前史が気になって

くるのであった。

そんななかで手にした本書の、考証家たちを十九世紀日本という枠組みのなかで評価しようとするアプローチは、いわば「即自」的な蔵書家研究と、究極的には近代天皇制国家との関わりで学問を見る立場とのあいだで、その欠を埋める可能性を秘めたものに見えた。

*

ここから本書の内容を紹介しよう。序章「国学考証派」研究の視点」によれば、本書が注目するのは、江戸時代後期から明治時代前期（十九世紀）に盛り上がった、「根拠をもとに結論を導き出すことで検証可能性を担保する、合理的な思考様式」を備えた「考証という営為」である。なかでも主役とされるのは、（漢学系ではなく）国学系の考証派である。大久保利謙こそ彼らを近代史学の源流の一つとして評価したものの、その後は近代史学の祖と目された漢学系考証学者のライバルとしての否定的な取り上げられ方を除けば、近年までほとんど研究対象になっっていなかった旨が、その理由として提示される。彼らの特質としては、①文献の校訂や編纂・出版を含めた広義の歴史考証の重視、②政策に奉仕しようとする「実用主義、登用志向、在官意識、官学意識」と、それゆえの歴史考証から宗教性や文芸性を切り離そうとする姿勢、③政治機構や文献入手を可能にするネットワークへのアクセス性の問題と結びついた江戸・東

京という地域性、が挙げられる。そして分析の視角としては、彼らの学問上の方法や成果について、①具体的にどう近代的学問に受け継がれたか、②どう政治的・社会的実践につなげようとしたか、③直接的影響関係・人脈なども加味して取り上げる、ということが掲げられる。

第一部「江戸時代後期における「国学考証派」では、幕府や諸藩で国学考証派が政治的有用性を示した事例が紹介される。第一章は屋代弘賢や和学講談所を主役とする「寛政の改革と「国学考証派」の登場」である。故実家や賀茂真淵・本居宣長のような国学者とは別に、寛政改革を契機に考証・文案作成能力を必要とされ国学考証派が登場する様子が描かれる。第二章「考証の浸透」は、幕府儀礼をめぐる屋代弘賢と松岡行義父子の交渉や、水戸藩の『大日本史』をはじめとした編纂事業を事例に、国学考証派の社会的浸透を取り上げるとともに、平田篤胤との比較によって、国学考証派における在官意識の強さや宗教性・倫理性との分離傾向を指摘する。第三章は、対外交渉の在り方が大きく変化した幕末期に活躍の場を広げた前田夏蔭や、開国を踏まえ設置された紀州藩古学館での小中村清矩の、歴史考証を重んじた活動を取り上げた「幕末期における「国学考証派」の機能」になる。

第二部「「国学考証派」の方法とその深化」は、彼らの考証の在り方を、作品に寄り添って紹介するものになる。第一章「屋代弘賢の歴史考証」は、屋代弘賢が進めた『古今要覧稿』

編纂事業について、その作業過程や論証の具体相を紹介する。第二章「小中村清矩の『六国史』考証」は、明治版「国史大系」と、それに影響を与えた小中村清矩校訂の諸本とを比較分析し、後者に近代史学の基盤としての役割を認める。第三章「木村正辞の『万葉集』考証」は、木村正辞の旧蔵書を概観したうえで、彼の『万葉集』研究が、校合・善本の蓄積を前提にした用例分析を踏まえた考証によることを、具体的に示している。これらの議論には、主役となった学者に限らず、彼らの考証作業に影響を与えた様々な学者・蔵書家が姿を見せている。当該期の知的ネットワークの広がりがうかがえる。

第三部は「「国学考証派」にとつての明治」と題し、明治政府のもとでの国学考証派の活動が紹介される。第一章「小中村清矩・木村正辞の官省出仕と考証実務」では、津和野派に対する平田派の敗北・没落という一般的な国学像に對置する形で、新政府における国学考証派の在り方が提示される。国史や『古事類苑』に教科書の編纂、官制改革案の起草、神祇部局や司法省における調査実務など、彼らは明治国家において、その考証能力を生かした活躍の機会を得ていたのである。そして、かかる役割の後継者育成のために設けられたのが東京大学文学部附属古典講習科である。第二章「「国学考証派」の後継者としての池辺義象」は、小中村清矩が開示した古典講習科における教育の在り方を紹介したうえで、清矩の養子になった池辺義象をはじめとしたその卒業生たちの活動を、国学考証派を継承する

ものとして位置付ける。

終章の題は「国学考証派」の歴史的意義である。国学考証派たちの活動の縮小・死去の過程を詳述し、明治政府の運営の安定化とともに彼らの役割は終わったものの、その方法と文献学上の基礎的な成果は近代人文学の素地となった旨を説く。その上で、本書の内容を要約し、課題として残された論点を列挙する(①為政者の考証観、②近代人文学の側にとりどんな影響をもたらしたのか、③国学考証派の文人的側面、④市井の考証家などに特徴的な、純粹な知的営みとしての考証の文化的広がりが、⑤国学考証派と相通する、遊びと融合した好古趣味に基づく活動)。

*

評者の見立てでは本書は、文人・書痴をめぐる好事家的関心に応える研究としての魅力は勿論、そうした目から見られることの多かつた学者たちの営みが、それに留まらない歴史的役割を持ったものであると明瞭化・定式化したという意義を持つ。考証的・実用志向で神学や文芸趣味を後継に退かせた小中村清矩ら近代国学者の政治的有用性を強調した藤田の研究などによって、平田派の没落に明治国学史を代表させる議論は、既に過去のものになっていた。そして本書は、考証能力によって政治へ貢献し、あるいは近代的人文学の前身となった国学的営為が近世段階で既に確認できること、広い視野と具体的な事例から示して見せた^①。近世後期の蔵書家・考証家・好古家たちをめぐ

るこれまでの研究があまり成功(もしくは意図)してこなかった通史的位位置付けが、少なくとも部分的には、ついに与えられたのである。近世史研究者にも明治史研究者にも、広くお勧めできる一冊である。

また、本書が示した実証成果が現在の様々な学問分野にとつて関わりがある点も、強調しておきたい。国語国文学、歴史学、美術史学、考古学、法制史学、神道学……国学考証派の知的営為が先行研究あるいは前史にあたる業界は幅広い。学史を重んじるそれらの世界の研究者にとつて得るものがあることも、間違いあるまい^③。

*

最後に蛇足のような読後感を一つ。十九世紀に活躍した学者の一群についての国学考証派という本書の定式化は、詳細かつ丁寧な実証に即したもので、一般化の在り方にも無理がないように見える。ただ本書のミクロな叙述は、国家にその知的能力を持って奉仕しようとした国学考証派の面々が、学問的性格を異にする数多の学者たちや学者ならざる者として生きた当該期の人々との間に取り結ばれた、広範なネットワークの中で活動していたことをも浮き彫りにするものであった。屋代弘賢一人とつてみても、篤胤のような癖のある人物も含めた国学者との関係に限らず、旗本としての地位、幕府儒官との役割分担、書家としての名声、大名との交際——その「考証」活動を論じる

上で考えなければならぬつながりの在り方は、本書が示唆するところだけでも、実に多様である。国学考証派を「考証の世紀」の輝きとして評価する分には問題なかるうが、「考証の世紀」を織り成したのは国学考証派だけでは決しない⁽⁴⁾。そして本書が事細かに描き出した国学考証派の営みでさえ、彼らの努力のうち、ごく一部でしかない。本書の外側に広がる当該期の知の布置状況を本書と同様の解像度で描き出し、「考証の世紀」の全貌に迫ろうとすることは、その作業過程の魅力はさておき、課題としてはほとんど達成不可能なものに思えてくる。今では失われた「考証」の総体は、果たしてどれほどのものになるのであろうか。考えるだけで気が遠くなる。

注

(1) ただし宗教性の切り離しという特質については、藤田説のほ
うが限定的なものとして評価している点、両説の違いとして留意
が必要である。また、平田篤胤が持つような宗教性とは一線を画
した形での倫理性・道徳性を伴った営為は、本書の射程の外に見
える。

(2) 国学系の「考証」活動に注目して、近世後期の政治や社会の
性格を論じる研究は、後進のあいだでトレンドになってもいるよ
うだ。古畑侑亮や金炯辰の研究を見よ。

(3) 歴史学の外側における本書の意義という点で気になったのは、
本書が国学考証派に文芸性の抑制という性格を認める一方で、彼

らの歌会活動や『万葉集』考証について取り上げているところ
である。後期国学については、村岡典嗣(『増補本居宣長』二、平
凡社東洋文庫、二〇〇六年)以来、「歌文派對古道派(平田派)」
という図式が存在してきたわけだが、国学考証派はこの図式を脱
構築するものになるのか、それともやはり前者に入るのか。和歌
をめぐる著者の見解、もっと詳しく知りたいところである。なお、
この点に関する評者の見解は「本居内遠の文事」(『日本文学』六
九―一二、二〇二〇年)。

(4) きりがないので例示は一人だけにしておくが、やはり紀州藩
に仕えて考証を得意とした長澤伴雄(近年では亀井森が研究を進
めている)でさえ、西に活動拠点を置き、歌壇の大立者だった点
で、本書の示す国学考証派の特徴が当てはまらない存在になる。

(佐賀大学准教授)